

# 「エジプト死者の街の参詣における参詣のシャイフと参詣書」 Shaykhs and the Books of Ziyara on Visits to the Egyptian City of the Dead

大 稔 哲 也  
Ohtoshi Tetsuya

On the outskirts of Cairo in Egypt, at the foot of Mount Muqattam, once revered as a sacred mountain, stretches an extensive, continuous cemetery district. Commonly known as the City of the Dead, it has been primarily a Muslim cemetery since the coming of Arab Muslim rule in the 7th century. Descendants of the prophet Muhammad, Muslim “saints,” and notable figures in Islamic history have been buried there, and during the 12th-17th centuries people of all ages visited it in great numbers, making it “Egypt’s Foremost Amusement Spot.” Markets and lodgings also were available, and the storytellers (qâss) who played and recited epic poems about Arab heroes, and religious singers (qawwâl) were active there. Preachers (wâ’iz) who admonished people with religious sermons and Qur’an readers who set the Qur’an to music also were often seen. In addition, Sufis established a base there and immersed themselves in religious discipline in groups, in the manner of their master. It is also well known that many people lived in the City of the Dead from pre-modern times. At present, as many as 1.5 million people are residents of the cemetery, and it is considered a social problem.

From the 12th-17th centuries group pilgrimages to the City of the Dead were extremely popular, in this respect differing greatly from the rest of Sunni Muslim society. It was shaykhs (leaders, authorities) of al-ziyâra who led religious groups of visitors (tâ’ifa) and provided explanations on the individual visiting routes they took. They were also the authors of the Books of Ziyâra, guidebooks for visiting the City of the Dead. This presentation pays particular attention to these shaykhs of al-ziyâra and considers their relation to the guidebooks. In this regard, special consideration is given to the shaykh Ibn ‘Uthmân and his family, who played a major role in establishing ziyâra customs in Egypt. His book, *The Faithful Visitors’ Guide to the Tombs of the Righteous*, was the most frequently copied and quoted. The most interesting point, however, is that information was appended to it after the death of Ibn ‘Uthmân. In this presentation I discuss my current interpretation of the significance of the interpolations and the peculiar construction of this guidebook, as well as its relation with the family of Ibn ‘Uthmân. In addition, I make use of a number of copies of the manuscript gathered from various countries. Moreover, I comment on the possibility of using “waqf (religious endowment) documents” in this sort of research.

## 1. はじめに

筆者はこれまで、エジプト・カイロの郊外に展開する広漠たる墓地区、「死者の街」について、しばしば論及してきた。また、『四国遍路と世界の巡礼---アジアの巡礼---』（2005年）における報告では、死者の街参詣の慣行と参詣者の心性を扱い、近年は他に、墓地区の公共性や参詣対象とされたムスリムの聖者と聖地の創造について、考察を深めてきた。加えて、ムスリム社会における聖者崇敬について、当該の地域社会における政治権力の政治・経済的支援が大きな役割を果たしてきたことを論証した。今回は、四国遍路との比較検討ということを一義に念頭に置き、「参詣のシャイフ」と「参詣の書」（双方とも後述）について述べてみたい。とくに、参詣書の成り立ちと、その著者であった参詣のシャイフ達に焦点を当てることとなる。

愛媛大学の「四国遍路と世界の巡礼」研究グループに参加させていただいて以来、筆者が再考するに至った点は数多い。そのなかで、イスラームにおけるハッジとズィヤーラの区別について、世界各地の巡礼・参詣のなかに位置づけ、比較して際立たせながら考究できるようになったのも、大きな成果であった<sup>1</sup>。すなわち、ムスリム（イスラーム教徒）の文脈では、メッカ巡礼のみをハッジと呼び、その他の参詣行為をすべてズィヤーラと呼ぶ。ハッジはイスラームの信仰の五行（五柱）の一つにも数えられる一方、ズィヤ



死者の街遠景

ーラは『クルアーン』や『ハディース(預言者ムハンマドの聖伝承)』に根拠を見出し難いものであり、学識者からはそれが盛んになって以来、歴史的に常に批判的的となってきた慣行である。

筆者はこれまで、イスラームはハッジとズィヤーラを峻別し、ハッジを特別扱いすると説明してきたが、このような論理構成を持つ他の宗教は見出し難く、そのためこの区別は知識人エリート層のみに共有され、民衆には理解されていなかったのではないかの疑念を、特に西欧キリスト教社会研究者からいただいた。しかし、ムスリムの民衆はハッジを粗型としてズィヤーラを実践していたとは言えようが、両者を混同していたことを示す史料は未だ発見されていない。むしろ、庶民であっても両者を区別し、ハッジを行った者を地域社会内で特別扱いしてきた実態が浮かび上がってくるのである。そこで、筆者は以下のように提示の仕方を変えて説明してみたい。すなわち、ムスリム社会においては、ズィヤーラと言う語が、訪問・参詣行為一般を指し、その対象は友人・家族から聖者や聖廟に至る、日常的・広範囲の含意を伴う一般的語彙であるのに対し、メッカの聖域を巡る行為は”ハッジ”と特別の語彙を与えられ、他の参詣行為と峻別されて特権的な位置を与えられてきた、ということである。

なお、筆者は中東内においてイスラームとの比較を念頭に、コプト・キリスト教徒のハッジ、及びズィヤーラについても考察してきた。コプトもハッジとズィヤーラの両語を使用するが、両者の区別は明確でなかった。そして、特定の聖所へ詣でる行為をハッジとして特別視する論理構成も有してはいなかった。しかし、その巡礼・参詣慣行について言えば、コプトのそれはムスリムに非常に類似しており、この慣行について後発となるムスリム側の史料は、コプトの巡礼・参詣慣行から影響を受けていたことを明記していた。ムスリムの学識者は、この点を大いに危惧していたのである。

さて、ここで我々は「死者の街」と称している地域について、ごく簡単に確認してみたい。具体的には、大カラーファ(al-Qarâfa al-Kubrâ)、小カラーファ(al-Qarâfa al-Sughrâ)、サフラー地区(al-Sahrâ')などと史料中に固有の地名で語られる墓地区の総称であり、より厳密には死者の街ではなく、”(現在の)カイロの周辺部に展開する諸墓地区”、とでもすべきところであろう。死者の街という呼称自体、欧米からの訪問者による呼称に由来しており、オリエンタリズムの観点からも問題をはらんでいるが、現在は現地のアラビア語へもこの表現が逆輸入されてきている。ここでは、読者へのインパクトやスペース節約のためもあって、便宜上の使用を諒とされたい。

同所は古代王朝期からグレコ・ローマン期を経て近代に至るまで、恐らく聖地として敬慕されてきており、それぞれの時期の墓地を包摂している。しかし、現存する姿を見ると、圧倒的にムスリムの墓地という印象となろう。中世ヨーロッパからの旅行者たちも皆、この地区の建築群に匹敵する荘厳さをヨーロッパに見たことはないと絶句していた。また、ペストの猖獗によって大打撃を受ける以前の最盛期、死者の街だけで恐らく5万人以上の人口を擁していたであろうと推察される。これは当時のヨーロッパ最大級の都市に相当し、勿論、カイロはその数倍の人口を抱えていた。

参詣者達の最大の願いは聖廟における祈願成就であり、その祈願内容は病の治癒や借金の帳消しから、護身、子授かり、旅の安寧、など多岐にわたった。その大半は現代の我々にも切実に共感できるものであった。また、それだけに止まらず、死者の街は当時、「エジプトで最も人が集まる行楽地」と化しており、そこには性差・年齢差・社会階層差を超えて人々が蝟集していた。クルアーン詠みが節を付けて人々を引きつけ、説法師の座で人々は感涙を流し、物語師の語りや宗教歌手の歌を楽しみにしていた。スーフィーたちの集団ズィクル(神の御名を唱えつつ、一定の動作を行う)に加わることも可能であった。支配者層は酒宴に興じ、冠水期のハバシュ湖畔で風景を愛でる連歌を行っていた。また、人々は墓廟に滞留し、夢・幻視の中で故人や聖者とかわることを望んでいた。すなわち、住民や旅行者達は現代の観光客のようにピラミッドへ行くのではなく、むしろ行楽には死者の街へ出かけていたのである(ピラミッド行楽も皆無ではなかったが)。

## 2. 参詣のシャイフと参詣書

「参詣のシャイフ(shaykh al-ziyâra)」とは、参詣者のグループ(ターイファ、講)を率い、その得意とする順路で参詣に同行解説していた者を指す史料用語である。彼らは各墓で故人の事績・美德やその場の御利益について、同行者達に語り聞かせていた。1442年には、同時に11のグループが死者の街に出ているという盛況ぶりであった。彼らは往々にして死者の街内や隣接する宗教施設に滞留しており、死後は死者の街に埋葬された。旅行記などの記述から推測すると、参詣の講は恐らく地縁・血縁によっておらず、所定の出発地点・出発時間に集合した者たちが、そのまま講を結ぶ形になったものと思われる。

また、彼らの著した参詣のガイドブックとも言うべき書物が『参詣の書(kutub al-ziyâra)』であった。そ

ここではまず、『クルアーン』やハディースをもとにムカッタム山麓の聖性や、参詣の作法が体系的に述べられており、次いでそれぞれの参詣シャイフが得意とする参詣順路に従って、被葬者の事績・逸話や、各聖墓に固有の慣行、祈願成就の情報などが詳述される。

カイロ周辺の墓地区を扱った参詣書だけでも、20点以上が知られており、残存するものも10点近くある。参詣書の内容は相互に似通っており、基本的には先人たちの参詣書を検討して取捨選択した上で、自分の情報を少しばかり加える、という形式を取る。参詣書はまた、口承文化の世界を良く伝えており、語り物文学や説教師の語りの内容と類似の情報も多く含まれていた。さらに、被葬者が人々からの崇敬を集めた聖者の場合、その奇蹟・美質(カラマ)についても、豊富な事例を盛り込む結果となった。

さて、今回は参詣のシャイフについて考察を深めるため、参詣書や各種史料に出てくる参詣のシャイフを以下に一覧にしてみた。ただし、参詣書を草したとされる者(約20名)については、すでにYusuf Raghīb氏がかなり網羅しているので、ここでその大半は略す<sup>2</sup>。

《参詣のシャイフのリスト(主として参詣書があまり有名でない者)》

- ・Abū al-‘Izz ‘Izz al-Qudāt al-Hajjār (K-106, T-234)
  - ・‘Alī al-‘Umarī (Ghamri) (集団で夜に参詣した嘯矢。K-197, T-308)
  - ・al-hājj ‘Abd Allāh b. Mas ‘ūd (K-202, T-315)
  - ・Shihāb al-Dīn Ahmad al-ma ‘rūf bi-al-Ādamī (K-220, T-330)
  - ・Ahmad al-Mat ‘am(al-Mat ‘ūm) (K-244, T-347)
  - ・Abū ‘Alī b. Ahmad al-ma ‘rūf bi-al-Kātib (ahad mashāykh al-risāla. T は ziyāra に作るが誤り。340年 A.H.年没。Mu-208b, K-292, T-377)
  - ・‘Ābid b. ‘Abd Allāh (水曜日中に参詣した嘯矢。K-302, T-384)
  - ・‘Alī al-Maqṣī (al-Maqṣanī) (K-305, T-387)
  - ・Awlād al-Jalāl (al-Halāl) (彼らは「夜の参詣シャイフ」、K-311, T-391)
  - ・Abū Muhammad b. ‘Abd Allāh b. Rāfi‘ b. Tarjam b. Rāfi‘ al-Shāri‘ī, al-Shāfi‘ī al-Maqābirī al-Zuwwār ‘Ābid (561-638/1241年没。最初に水曜日に参詣) *Khitat* 2/461
  - ・‘Alī Ibn al-Jabbās (556/1161-637/1238年。最初に毎週金曜夜に集団参詣。スルターン・カーミルとも同行) *Khitat* 2/461, 4/2/908, al-Mundhirī 3/551, K-305
  - ・Muhammad al-‘Ajāmī al-Su ‘ūdī (shaykh al-zuwwār, 809/1407年没。両足が悪く、土曜の日昇後に騎行。800年末頃) *Khitat* 2/461, 4/2/908
  - ・Shams al-Dīn Muhammad b. Isā al-Majūshī al-Su ‘ūdī (前者の跡を継ぎ、土曜の日昇後に騎行した al-zā’ir) *Khitat* 2/461, 4/2/908
  - ・Muhī al-Dīn ‘Abd al-Qādir b. ‘Alā’ al-Dīn Muhammad b. ‘Alam al-Dīn b. ‘Abd al-Rahmān al-shahīr bi-Ibn ‘Uthmān (815/1412年没。前々者の跡を継ぎ、前者同様、土曜の日昇後に騎行した al-zā’ir) *Khitat* 2/461, 4/2/908
- (以上、KはIbn al-Zayyāt著 *Kawākib al-Sayyāra fī Tartīb al-Ziyāra*, Cairo, 1325 A.H., Tはal-Sakhāwī著 *Tuhfa al-Ahbāb wa-Bughya al-Tullāb*, Cairo, 1937, *Khitat*はal-Maqrizi著 *al-Khitat*, Būlāq, 1270 A.H., al-Mundhirīは *al-Takmila li-Wafayāt al-Nuqla*, Bayrūt, 1988を示す。)

これを一瞥して推定するに、「参詣のシャイフ」や「参詣の書」の存在が、カイロ周辺の墓地区において定着したのは、おそらく12世紀(とくにその後半)頃であり、またそれが史料上の用語として定着したのは14世紀頃であろうか。エジプトにおける聖者崇敬の高まりを追う形で時間的には推移していったものと想定される。

また、彼らの学識について言えば、彼らは12-16世紀に多数書かれた各種伝記集に記載されることはあまりなく、一流の学識者とまでは看做されていなかったようである。しかし、彼らの参詣書の内容を見る限り、クルアーンやハディース、他の多くのジャンルの書物に対する一応の知識は有しており、アラビア語の文法上も一定レベルに達している。

それでは次に、この参詣書の成り立ち方について、具体例をもって、より詳細に考察を加えてみたい。

### 3. イブン・ウスマーンとその参詣書『*Murshid al-Zuwwâr ilâ Qubûr al-Abrâr* (恭順なる墓々への参詣者への導き)』再考

ここで取り上げるのは、イブン・ウスマーン著の『*Murshid al-Zuwwâr ilâ Qubûr al-Abrâr* (恭順なる墓々への参詣者への導き)』である。その理由は、同書が現存する最古の参詣書であることに加えて、最も良く他の史料に引用されてきたことによる。現存する写本数も、参詣書中最多である。同書の写本は世界中に点在するが、筆者は実際にそれらを逐一検討してきた。列記すると以下のようになる。

- 1)大英図書館所蔵 Or.3049 (100fols.)
- 2)アズハル図書館所蔵 al-Azhar Ta'rikh 'Arûsî 3974 (85fols.,アラブ連盟大学附属写本研究所 Ta'rikh 1604、エジプト国立図書館Dâr al-Kutub所蔵 H 34341とM 57805も皆アズハル本のマイクロフィルム複写。)
- 3)アヤソフィヤ写本 Aya Sofiya 2064,( 227fols.,アラブ連盟大学附属写本研究所 Ta'rikh 239)
- 4)エスコリアル図書館所蔵 Escorial 1751,(105fols.,アラブ連盟大学附属写本研究所 Mutafarriqât 470)
- 5)現バヤズイット図書館所蔵 Welieddin 818 (111fols.)
- 6)エジプト国立図書館所蔵 Majâmi' Tal'at 490 (73fols.)
- 7)エジプト国立図書館所蔵 Buldân Taymûr 65 (78pages)
- 8)大英図書館所蔵 Or.4635 (350fols.)
- 9)ゴータ図書館所蔵 Gotha 1091 (229fols.)
- 10)エジプト国立図書館所蔵 Dâr al-Kutub Ta'rikh 325 (135fols.)
- 11)エジプト国立図書館所蔵 Ta'rikh 5129 (249fols.)
- 12)大英図書館所蔵 Add. 26045 (207fols.)
- 13)エジプト国立図書館所蔵 Tasawwuf 1408 (133fols.)
- 14)(未見)アブー・アル=アッバース・アル=ムルスィー図書館所蔵(アレクサンドリア)Abû al-'Abbâs al-Mursî, Tasawwuf 1132 (183fols.)

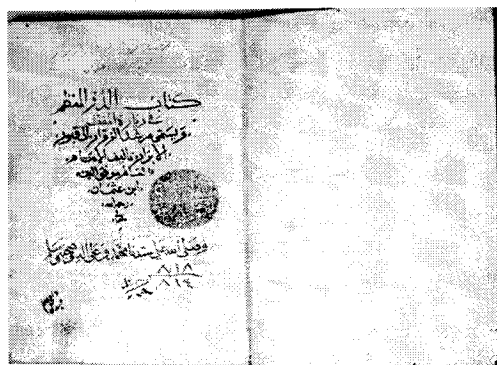
さて、本書の成り立ちと在り方について考える上で大変興味深いのは、同書がその著者と推定されるイブン・ウスマーンの没年(1218年)以降の情報を記載していることである。それについては、著者の比定を変える方法もあるが(同名の後代の別人とするなど)、やはりY. Raghîbによる比定(1218年没のイブン・ウスマーン)に従う方が整合的であると考えられる。

この没年をもとに、著者没後の情報と断定されるのは、①著者没後の事実や、没後に埋葬された人物への言及箇所、②没後に活躍した人物の著作から引用した箇所であろう。①については、Kamâl al-Dîn Ibn al-'Adîm(*Murshid* は660/1261-62、666/1267-68、668/1269/70年没の3説を挙げる)など、②についてはal-Safadî(1363年没)からの引用などを挙げるができる。つまり、アイユーブ朝後期からマムルーク朝前期を中心に、771/1369-70年を下限として書き加えがなされたと判定できよう。これらの書き加え部分を除くことによって、イブン・ウスマーンの原テキスト復元が可能となるはずである。

ところで、先に列挙した*Murshid*写本群にこの書き加え情報を重ね合わせてみると、著者の没年(1218年)までの記述によっている写本群と、没後の記述が付加されている写本群とに大別できる。先の1)~7)は原著者没年前の記述のみによる、短くより古い版にもとづいて書写されたと思われ、8)~14)は付加部分を含む、新しくより長い版に基づいて書写されたと推定されるのである。

以上の情報に他の写本の記載内容などを加えてまとめると、*Murshid*の著者は1218年に没したMuwaffaq al-Dîn Abû al-Qâsim (Abû Muhammad) 'Abd al-Rahmân b. Abû al-Haram Makkî b. Abû 'Amr 'Uthmân b. Ismâ'îl b. Ibrâhîm al-Misrî al-Shâri'î al-Shâfi'îであり、何者かが後代、より正確には14世紀後半頃を下限とする記事を追加した。そして、追加記事のない写本も、追加部分のある写本も、共に何度も筆写されていったと推察される。また、*Mursid*の中には、書名を『*al-Durr al-Munazzam fî Ziyâra al-Jabal al-Muqattam* ムカッタム山参詣における整然たる真珠』などと別に作るもの(大半は併記)が存在するが、それらは全て旧ヴァージョンに基づいている。このことから、元来は、少なくとも双方の署名を併記された著作であった可能性があると考えられる。

この復元作業から言えることとして、第一に、「参詣の作法」は1218年までに書かれた旧ヴァージョン内にすでにまとめられており、その時点までにそれを可能にする社会的土壌が醸成されていたということである。



Murshidのバヤズイット本表紙

また、後に付加された部分にタサウウフ(スーフイズム)関連の記述がより多く見られ、タサウウフのエジプトへの浸透と関連しているものと推測される。ちなみに、書き加えは、*Murshid*の後半部の方により集中している。

では、この *Murshid* に書き加えを行ったのは誰だったのだろうか。現時点での結論から言うと、著者イブン・ウスマーンの子孫であった可能性を指摘しておきたい。イブン・ウスマーンの一族は、参詣のシャイフとしては珍しくその一族が著名で、学識者(ウラマー)の有力家系として人物を輩出して来た。著者の祖父 Abū ‘Amr ‘Uthmān はシャーフイー派の法学者であり、著作でも知られる。父 Abū al-Haram Makkī(1142-1217)は、メッカなど各地で学び、カイロでハディースを講じていた。また著者の兄弟達のうち、Salih(1166-1219)はハディースを講じ、Abū ‘Amr ‘Uthmān(1261 没)も『クルアーン』解釈学やワアズ(宗教諫話)に勤しんでいたことで知られていた。彼らはみなムカッタム山麓に在った一族の墓所に埋葬され、著者イブン・ウスマーン自身も祖父の墓で mi ‘ad(講話会、集会)を持っていた。<sup>3</sup>このように一族の系譜を少しでもとどれる参詣のシャイフは例外的であり、一族の子孫はさらに後代(少なくとも 15 世紀)まで活躍していたことが知られている。

すなわち、イブン・ザイヤート(1402 年筆)は *Murshid*からの引用部分に挿入するような形で、「ウスマーン一族の墓地」について頁を割いていた。そして、*Murshid*の著者である Ibn ‘Uthmān について「子孫は今日まで遺っており、善行者達、学識者達である」と述べていたのである。<sup>4</sup>イブン・ザイヤートと同時代に死者の街において知られていたイブン・ウスマーンと言えば、次のワクフ(寄進財)文書の記述が想起されねばなるまい。

804/1402 年、及び 807/1405 年に草されたアミール・スードゥーン・ミン・ザーダのワクフ文書には「いわゆるイブン・ウスマーンのグループ」が参詣者を率いてカラーフア参詣に週 2 日やって来ると記されていた。すなわち、15 世紀初めにあっても「イブン・ウスマーンのグループ」の名で人々に了解される参詣のシャイフが居たと推定されるのである。この人物こそ、*Khita*(2-461)に見える Muḥī al-Dīn ‘Abd al-Qādir b. ‘Alā’ al-Dīn Muhammad b. ‘Alam al-Dīn b. ‘Abd al-Rahmān al-shahīr bi-Ibn ‘Uthmān (815/1412 年没。前出のリストにあり)であろうと筆者は推察する。

イブン・ザイヤートの時代(1402 年著)にイブン・ウスマーンの名を冠した集団は、その参詣書 *Kawākib*の全編を見渡しても *Murshid*の著者一族以外に考えるのは困難であろう。そこで、なお推論を進めると、*Murshid*の原著者の子孫が、参詣のシャイフとして依然、参詣活動に従事していた可能性があらう。そして、後代に獲得した参詣関連の知識を *Murshid*の原本に書き加えていったのではなかろうか。この推論は、先に検討した書き加え部分の年代(最も遅いもので 1370 年頃)ともほぼ符合する。なお、*Murshid*の本文中に「著者曰く qāla al-mu’ allif」とある場合でも、後代に挿入された可能性の高い箇所が在ることも興味深い。著者と後代に名乗れるほど、原著者に近い人間であったように思われるのである。<sup>5</sup>

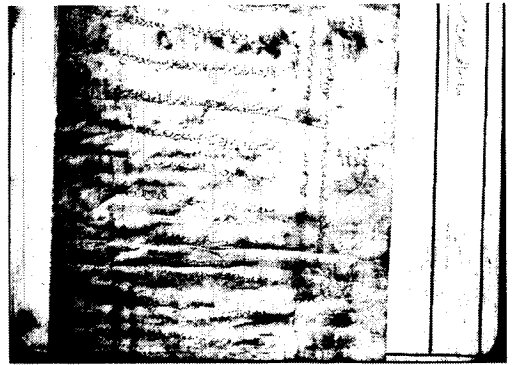
この *Murshid* は、後に幾つも本格的な参詣書が著されたのにもかかわらず、オスマン朝期に至っても繰り返し書写されていた。このことは、本書が依然として参詣書として一定の有効性を保ち続け、そのジャンルの権威書と看做されていたことの証左となろう。さらに、他の参詣書もオスマン朝期以降まで書写されて来たが、内容に大きく付加がなされているのはこの *Murshid* だけであることも特筆すべきであらう。このことも先述したようなイブン・ウスマーンの子孫の特殊な在り方と関連すると推測される。すなわち、イブン・ウスマーンの子孫も参詣グループを率いていたからこそ、後代の情報を加えたのではという推論である。

以上のように、*Murshid* は後代に書き加えされたテキストであり、参詣のシャイフであった著者や書き加えの実行者は、不断のフィールドワークや読書の成果をそこへ注ぎ込んだのである。また、参詣者や参詣のシャイフの保持した伝承は、参詣書や墓誌の形で文字化され、あるいは墓・墓廟の形に 3 次元化された。それらはまた逆に、参詣のシャイフや参詣者によって情報収集され、彼らの言説を形作っていった。その意味ではテキストとフィールドや事物との間の相互浸透作用の結実という側面に加えて、つねに「生成するテキスト」としての側面も備えていたのである。

今回、改めて参詣の書について精査してみて気づいたことだが、<sup>あまた</sup>数多い参詣のシャイフ達は、顧客獲得のためにも、他の参詣シャイフと自らを差異化したうえで、優位に立つ必要が在ったと思われる(無意識に行われることもあったであらう)。その意味では、参詣書も他の参詣シャイフとの論争や、他シャイフの意見の修正などを多く含んでおり、いわば闘争のアリーナという側面を有していたとすら言えるかも知れない。

#### 4. 終わりに代えて

まとめに代えて、ここでは死者の街参詣研究に対する、ワクフ(寄進財)文書利用の可能性を再度指摘しておきたい。というのも、死者の街の膨大な数存在した宗教施設(ザーウィヤ、ハーンカーなどと称されたスーフィーの修道施設、学院やモスク、あるいはこれらの複合体を含む)、墓廟の大方はワクフによって維持運営されていたのであり、ワクフ文書は死者の街に存在しそれら建築物の運営について詳細な情報を伝えていた。たとえば、墓廟でのクラーン詠誦やそこで学ぶ孤児達の奨学金の額から、清掃人の給与や備品代まで運営の細目が明記されていた。また、スーフィーの生活ぶりや墓廟管理の在り方、参詣者のご接待の問題(先述のスドゥーン・ミン・ザーダのワクフ文書は参詣者へのお手当について明記していた)などについても、他史料には見られない情報を得ることが可能である。ワクフ文書研究は最終的に、聖地の運営におけるインフラ整備や、地域社会における政治・経済的支援の重要性を再認識することにつながるのである。



ワクフ文書例

また、今回論じなかった問題に、死者の街はなぜ観光化しなかったのか(あるいは、これから観光化するのか)、そしてそれとは対照的にピラミッドはなぜ観光化したのか、という問いが残っている。これにはインフラの劣化とその背景にある政治権力との関係、世俗化の在り方の問題、メッカへのハッジとその他へのズィヤラとの相対的關係におけるグローバリゼーションの影響など、論じ切れなかった多様な論点に関連することであろう。

最後に、筆者は日本研究との共同研究の可能性について、再度強調しておきたい。愛媛大学の「四国遍路と世界の巡礼」研究グループとの共同研究作業は、中東イスラーム研究や欧米社会の研究の枠内に止まっていたは決して気づくことのない、豊富な論点を提示してくれた。ここに改めて謝意を記して筆を擱きたい。

- 1 四国遍路と世界の巡礼研究会編『四国遍路と世界の巡礼』法蔵館、2007年、169-183頁
- 2 Y. Râgib, "Essai d'inventaire chronologique des guides à l'usage des pèlerins du Caire" *REI* 16 (1973) pp.259-280.
- 3 al-Mundhirî, *al-Takmila li-Wafayât al-Naqla*, Bayrût, 1988, vol.2, 362-363, 434, 475 頁、Ibn al-Sâbûnî, *Takmila Ikmâl al-Ikmâl*, Baghdâd, n.d., 226-230 頁、al-Dhahabî, *Ta'rikh al-Islâm*, Bayrût, 174-175, 245-246, 292-293 頁 (613-616A.H.年の訃報部分)。
- 4 Ibn al-Zayyât 著 *Kawâkib al-Sayyâra fî Tartîb al-Ziyâra*, p.309.
- 5 あくまで大まかな推論に過ぎないが、1412年没のイブン・ウスマーンは、原著者イブン・ウスマーンから数えてほぼ6代目である可能性がある。当時のエジプトでも、祖父など先祖の名前(ここでは'Abd al-Rahmân)を好んで使用する事例がしばしば見られた。